

議会が変わればまちが変わる

元栗山町議会議長
橋場利勝

みなさんこんにちは。ただいまご紹介をいただきました橋場でございます。私が議員を辞めて正式には八年四ヶ月ほどになります。ですから、議会のことは忘れてしまいましたし、こうして皆さんの前で話すことは何もないと考えておりました。ところが、この春、私が現職のときに大変お世話になった神原勝先生からこの講演のお話があり、最初はお断りをしたのですが、「まだまだ先のことだから」と言われ、先のことを考えないで引き受けした今、本当に後悔しています。

八年も前のことですから、今思い出しても正確ではない部分もあるかもしれませんが、それぞれ以前に話したことに重複するかもしれませんが、よろしく願います。さらに、栗山町議会からは八人の方が応援に来てくれておりますが、かえって緊張してしまいますね。

今日ご参加されているみなさんは、ほとんどが議員だと伺っています。なかには、今年の統一地方選挙で初めて議員になられた方も数多くいるのではないのでしょうか。まちづくりに大きな夢と希

望を持って、皆さん立候補されたのだと思います。立候補にあたっては努力目標と申しますか、公約と申しますか、それを掲げて議員になられたのでしょうか。その上で当選されたのですから、その目標達成のために議員としてしっかりとがんばっていただける、と思っております。遅れてしまいました。ただ、みなさまのご当選を心からお祈りを申し上げます。

背中を押された住民からのひと言

私は議員を四期一六年やらせていただきましたが、三期目の選挙が近づいた議会終了後、執行側の管理職と特別職を入れた行政懇談会を実施しました。その幹部会での出来事だったかと思えますが、当時の選挙管理委員会委員長の女性から「議員の皆さんは選挙が近づくと、政策を掲げて活発的に町政を批判するけども、受かってしまうともうそれっきりですね」と言われました。まったくその通りで、私も選挙のために公約を真剣に考え

るのですが、受かってしまうと本当にそれっきりになってしまいました。

当時、私は議会改革をすすめていたので、これは厳しい意見だなと思いました。反面、議員の前で言っていたいただきましたので、背中を押された感じになったのも事実です。だからこそ、みなさんには掲げた公約をこれから一生懸命がんばっていただきたいと思っています。

さらに、全国で議員のなり手がいないという影響もあつたでしょう。今春の統一地方選挙は北海道でも三三市町村で選挙がありませんでした。つまり、無投票だったということになりますが、選挙の無いことが継続することは深刻な問題だと考えています。特に今、住民の選挙関心度は低くなる一方で、投票率も落ちていきます。こうした傾向は立候補されたみなさんの責任ではなく、町民の責任だと私は思っています。選挙が終わった今、改めて考えてみると、議会が中心となって問題解消するのではなく、住民のみなさんと十分連携を取りながら問題の解決策を探って頂きたいと思えます。

住民と執行機関とどう向き合うか

本題に入りたいと思います。今日与えられた演題は、私が現職のときによく使った言葉でもある「議会が変わればまちが変わる」です。当時は議員視察や取材に来る記者が非常に多かったのです

が、こうした方々にこの言葉を送ってきました。改めて、議会が変わるということはどういうことなのかを考えてみると、私は二つの意味があるのではないかと思っています。

一つ目は、いわゆる議会が主権者である住民のみなさんにどう向き合うか。二つ目は行政をつかさどる執行機関と議会がどう向き合うかです。基本的にはこの二つに尽きると考えています。みなさんもご承知の通り、執行機関の首長は早くから住民のみなさんと直接対話をすすめておりました。例えば、連合町内会の会長さんを集め、地域要望を直接聞くようにです。また、大きな政策的案件があれば、地域をそれぞれ回る住民説明会やパブリックコメントなどもすすめていました。

ところが、住民から見ても一番近い立場である議員は、こうした住民の代表であるということ意識していましたが、実際は住民から一番遠い存在になっているということは意識してこなかった。



だから私はよく「地方自治は住民自治が基本ですよ」と言ってきましたが、それを実現するためには議会こそ住民参加を積極的にすすめていくべきと考えるようになりました。住民参加と住民に対する情報公開、そして説明責任、これをしっかりと果たしていけば、住民の自治意識が盛り上がる。ここが議会の使命ではないか、と私は思っています。

一方で、議会は行政を監視する立場ですから、組織的に言えば機関対立構造になっています。しかし、議会と行政はともに地方自治を担う機関であり、地方自治の全盛を競う機関（機関競争主義）のパートナーだ、と私は捉えています。決して、議会は執行機関の追認機関ではありません。ほどよい緊張関係を保ちながらしっかりと議論を尽くす、厳しい監視の目を光らせるべきです。ほどよい緊張関係というのは、敢えて足を引っ張るとか喧々諤々する意味ではありません。私は政策レベルの緊張関係と考えています。

また、議会のレベルが上がれば、行政のレベルも上がると思います。ただし、その反対はありません。私は住民と執行機関とどう向き合うかを頭に置きながら、改革を進めてきました。議会基本条例の作ったのは二〇〇六年五月ですが、遡ること四年間の改革成果を後戻りすることないという意味で議会基本条例を制定しました。この経過については後ほど説明しますが、先ほど神原先生にお聞きすると、現在八〇〇以上の議会が議

会基本条例を定めているとのこと。しかしながら、議会基本条例どおりしっかりと議会運営ができていなのか。これが今、一番問われるところではないかと私は考えています。

議会への住民参加 議員報告会のスタート

ここからは、私が記憶に残っている議会改革について話をしたいと思います。先ほど、議会こそ住民参加をすすめるべきだと申し上げましたが、そのころも「今でも町政報告はしているし、町民対話をしている」という議員はいました。しかし、それはあくまでも自分の支持者に対する町政報告や対話であり、まだまだ支持者以外の町民のみなさんと議会や議員が対話するという考え自体が毛頭ありませんでした。

そこで、私は住民と議会が対話しているところがないかと調べてみると、全国で一カ所だけありました。それを参考として栗山町でも初めて議会による「議会報告会」というかたちの中で住民対話を行いました。これが議会基本条例を制定したちょうど一年前の二〇〇五年三月です。当時は議員数が一人でしたので、三つの班に分け、町内一二カ所にて議会報告会を行いました。私は一番最初の報告会に参加したのですが、そのときはテレビカメラも含めた報道陣が相当来ていましたし、住民も一〇〇人ほど参加していただきました。このように議会活動をマスコミにつなげること

も、議会の情報公開として一番大事な部分です。

そうした意味もあり、北海道で初めての議会報告会を行いました。

当初は「住民から厳しい意見があるだろうな」と思っていました。それを覚悟で臨んだのですが、いざ始めて見ると住民の評価が高かった。私が参加したところでは、町民から「町民から見ても、町がやっていることでどうもおかしいことがある。そんな時は議会がこのような対話を開いて、町に声を渡してほしい。今参加している議員だけではなくて、議員が替わってもぜひ報告会を続けてほしい」という声がありました。

議会報告会を続けるため 議会基本条例制定へ

私たちも報告会を続けるには条例制定が必要と考えていました。議会報告会終了後の反省会でも各班から住民反応を考えると継続という意見があり、それであれば条例制定を検討してみようという結論になりました。そのとき、議会事務局で今日の主催者でもある議会技術研究会が札幌市をモデルに作った議会基本条例試案に巡り合いました。照らしてみると、二年半の改革で栗山町がなんとかこれに食いついているかな、と感じました。また、どうしてもそぐわない部分もありましたので、そこは少し修正させていただきましたが、全国最初の議会基本条例を制定することになった

わけです。

そのような経過から、議会報告会を議会基本条例に盛り込みました。これで大勢の町民の皆さんと情報交換ができます。一方、議員が失敗しても責任を問う手段がありませんから、私は議決責任を説明責任とも書いておきました。だからこそ、議会報告会は町民に対し、議会の説明責任を果たす場と考えました。

議員は町民の選挙によって選ばれます。当然、住民からみると「この議員はどうなのだろうか」という評価の対象となるわけです。質問を受けても答えることもできない議員では困りますので、議員も一生懸命勉強します。つまり、議員にとっても、議会報告会は資質を磨く大事な機会になると感じていました。確かに、同じく当選した議員に対し「おまえ資質を磨けよ」と議員同士で言うわけにはいきませんから、こうした機会が必要となってきました。

そのような意味でも、住民との対話は大変大事なことです。思い起こせば、最初に議会報告会を開いたときは、町民の声のうち八割方が町側に対するお願いごとでした。正直困ったと感じましたが、回を重ねることにお願い事はだんだんと減っていき、「こうしたいほうがいいのではないか」というような建設的な意見が多くなりました。議会報告会によって町民の考え方も変わってきたのでしよう。

ただ、議会報告会も単純に同じことを続けてい

くとマンネリ化になってしまい、だんだんと参加する人が少なくなります。やはり、やり方を工夫しながら町民のいい提案しつかり受けて、行政側と相談しながらしつかりと政策に取り入れていく。こういうことも必要ではないでしょうか。

議会基本条例で定めた 使い勝手のいい一般会議

次に、私が記憶に残っているのは一般会議です。これほど議会基本条例が広がっているのであれば、一般会議も広がっているのだろうと思いますが、議会の会議と言えば会議規則にあるように、所管事務調査を担う常任委員会、特別な案件を審議する特別委員会、このほかにも議会運営委員会などいろいろありますが、これらは議決がなされて初めて開くことができるものです。また、議会として町民の意見を聞くこともありますが、この場合は公聴会制度あるいは参考人制度しかありません。さらに、これら制度利用の場合、すべて話し合う案件は決まっています。フランクに会議を開くというようにはなりませんので、今考えてみるといづらいつい制度だと感じます。

ところが、一般会議は議会基本条例で定めた法根拠のある会議になります。そして、相手も特定されておりません。町民誰でもいいですし、町民でなくてもいい。各団体、あるいは執行側でもいい。そういう意味で対象は幅広く、議決の必要も

ありませんから議員同士で相談して開催することができると。ですから、私は使い勝手のいい会議だと思っています。

利用の仕方によつては、この一般会議で議会の問題が相当解決できるのではないのでしょうか。ですが、さきほど議会報告会のところでも述べたように、同じことを続けていけばだんだんと参加者が少なくなつてきます。私の時は若い世代の参加者が少なかった。投票年齢が下がりましたから、若い世代に絞つて対話する。そのために一般会議を使つてもいいと思いますし、議員のなり手が居ない状況であれば、若い世代を一般会議で多用していくことも必要ではないでしょうか。

総合計画の対案作成が町・町民の意識改革へ

いろいろ話をしてみました。私が一番印象に残っているのは地方自治法第九六条二項です。一項は制限列挙で大体決まっていますが、二項は条例で定めることによつて議決することができますと規定されています。そこで、私たちは議会基本条例で総合計画を中心に五つの長期計画を議決事項にしました。私が議員になつたときは、総合計画の基本構想は法的にも議決事項になつており、基本構想自体も非の打ちようのないほど立派に出来ていました。ただ、一番影響がある「計画」は議決事項ではありませんでした。なぜ、議決事項にしないのだろうかとの疑問から、五つの長期計画

を助言・議決事項としました。

議会基本条例が制定された直後、「第四次発展計画」との名称で総合計画案が町側からできてきた。順番で言えば、本来は「第五次総合計画」となるはずなのに、どうして違うのかと考えてみると、元々が高度経済成長の時代に策定したもので、あの頃の計画は現状よりも発展していなければならなかった。ですから、第二次総合計画の策定時に第一次発展計画という名称とし、今回は「第四次発展計画」との名称となつたのでしょうか。ただ、昔から立派な計画はたくさんありましたが、私はそれが本当どこまで運営されたのだろうか、と疑いを持つていました。

町側から総合計画の説明を受けてみると、相変わらず計画のための計画でした。人口減少社会ですから、政策的に人口を増やすのであればいいのですが、そうではなく、計画的に人口増となつていきましたし、行財政計画も実態とかけ離れた計画になつていきました。総合計画を議決事項にした以上、議会の責任が問われます。議員から、「このような総花的な計画ではまずいだろう」との声が挙がり、議会として「議会議案の総合計画」を作ることになりました。

早速、議会議案作成委員会を立ち上げ、専門的知見も活用できるようにしましたので、神原先生に専門的知見からの助言をお願いしました。結局、修正に修正を重ねて六ヶ月かかって議会議案を作りました。恐らく、総合計画を議会で作成したとこ

ろは全国的にもないだろうとは思いますが、大変な苦勞でした。

結局、議会議案は厳しい財政運営をしている時で行財政計画、特に財政再建を中心とした計画になりました。さらに発展の時代ではなく、洗練されたまちづくりが大事だということと、「第五次総合計画」との名称にしました。一方で、町側には二五人の総合計画審議会の委員がおりましたので、こちらにも説明しなければなりません。そこで議会議案は議場を使つて説明することにしました。その時は執行側の席に総合計画審議会委員に座つて頂き、議員と審議会委員の皆さん以外にも議会モニター、神原先生、町側の管理職も来ていろいろと議論しましたが、「これが討論のヒロバとしての議場だな」と感じました。

結果として、総合計画審議会は議会議案を支持する答申を行い、その後も総合計画審議会答申を参考に、議会議案を検討しながら一般会議で詰めていきました。最後は町側も折れ、議会議案に沿った計画を町側の提案とし、それを議決したのですが、答申作りをした総合計画審議会委員から「栗山町議会も執行側の追認機関だと思つていました。しかし、実質は違つていましたね」と言われました。この言葉を聞いて、本当に工夫したかいがあつたと思ひ、感激しました。ここまで改革できたのは「計画」を議決事項にしたからです。議決事項にしなければなかなかうまく出来なかつたでしょう。

さらに、議会がしっかりとまとまってくると、

議会力を発揮する議会を作ることができるということを証明しましたので、総合計画審議会委員を始めとする町民の皆さんと町側の意識も多少変えることができたのではないかと思っています。

このように第五次総合計画の策定以来、「計画」を議決事項にしていますが、議会基本条例の中でも、町長が新しい政策提案をする際には七項目の説明責任を果たすよう規定しています。その四項目で、総合計画における根拠または位置づけを説明しなければならぬと決めていることから、当然、「計画」に無いことはできません。もし新しい政策を始めるときは、きちんと「計画」に入ってから進める必要があります。

また、時代の流れと共に「計画」も変わりますから、変わる度に町側は議会に変更した修正案を提案してきます。そして審議されて新しく実施されていくのですが、これは今までなかったことです。そうしたところから、町側もだいたい変わったと感じています。

町民のための計画へ 総合計画条例の提案

ところが、二〇一一年地方自治法が改正され、総合計画の基本構想策定は義務規定ではなくになりました。分権社会になったのだから、国がいつまでもこれやりなさいという必要がなくなったことが削除の理由だと私は考えていますが、総合計画は不要と思いませんし、計画がなければ政策はす

ずめることができないのですから当然、「計画」は必要です。

そこで、私たち議会は総合計画策定の経験を生かして、行政計画ではなくて、町民のための「計画」を作ろう。そのためには法令の根拠となる条例がなければ「計画」を作ることができませんから、議会が住民のみなさんと審議し、議会として総合計画条例を作ろう、ということになりました。早速、先ほどの総合計画策定と同じように策定委員会を立ち上げ、専門的知見からの助言として再び神原先生に入っていたいただきながら、試案を作成しました。試案はモニター、サポーター会議にかけたほか、前回の総合計画審議会委員の皆さんにも説明し、最後は町側と協議しました。話し合いは合わせると一六回くらいやったはずですが、

しかしながら、町側からみればこの部分は議会では無くて、執行側の権限だと考えていたようで、最終的には合意に達することはできませんでした。議会としてもこれ以上協議をしても無理だと感じ、終了としました。ところが、町側も根拠となる条例が無いと大変だと気づいたのか、三年後の二〇一三年、私が議員を辞めた後にはなりますが、このとき協議した条例案を参考にしたと感じられる総合計画条例を町側が提案し、制定されました。

まちを変えるために 新人議員へのエール

まとめに入ります。議会が何もしなくても議会

です。一生懸命やっても議会です。議員のみなさんが本当に楽な方がいいのか、苦勞してもやりがいがある方がいいのか。その部分は考えなければなりません。やはり、物事を進めるには大きな車が必要で、その車の苦勞が報われる状態も必要だと私は考えています。

みなさんに伺いたいのですが、議会で審議する議案の一〇割となるとちょっと困ってしまいますが、恐らく八割から九割は行政側の提案ではないでしょうか。きつと、修正もないでしょう。しかしながら、地方自治のアクターは議会と執行機関ですから、少なくとも一つや二つは議会から提案がないと議会の存在感はないと私は思っています。特にまちにとっていいこと、住民にとっていいことは、やはり議会として率先して政策提案していく、そういう時代ではないでしょうか。

二〇〇〇年以降、地方分権社会になりました。国からの機関委任事務がなくなりましたから、すべて地方で決めるという地方の自己決定、自己責任は格段に大きくなりました。だからこそ、議会に与えられた権能・権限をしっかりと果たすことができれば、私は議会も変わるし、まちも変わることができると思っています。議員一人ひとりの力というのはそんなに大きなものではなく限られていますし、そもそも議会は合議制の機関です。合議されて初めてそのまちの意思決定ができる。それゆえに合議するまでは喧々諤々の議論を尽くすべきです。そんなことを言う余地がないという

議案でも、町側が提案したものに對してもつよいものがないのか議論を尽くことが大事であり、そこからはじめて最良な意思決定ができます。

それが住民から付託を受けた議員の責任ではないか、私はそのように感じています。本日ご参加している議員のみなさん一人ひとりがまちを変え

私はなぜ議員になったのか 基調報告1

住んでいて良かったと思える雄武のために

雄武町議会議員

遠藤 友宇子

私の原点

私の住む雄武町はオホーツク海に面した漁業と酪農の盛んなまちで、人口は約四四〇〇人です。

二〇一八年の町議会議員補欠選挙で議員に当選し、今年四月の統一地方選挙で再選し、議員二年目になります。私がいつもご指導いただいているのは、元町議会議員の三浦寿太郎さんです。三浦さんは、私が小学生のころから「雄武町かわらばん」を発行していて、三浦さんのうしろ姿をみて議員としてのあり方を学んでいます。この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えしたいです。

私は一九八一年生まれで三七歳になります。中学校卒業まで雄武町で暮らし、高校生のときは江

る、あるいは議会を変えたい。その原動力となって活躍いただければ、必ずまちは変わると思っています。心からご期待を申し上げながら、私の拙い話ではこれで終わらせていただきます。本当にどうもありがとうございました。

別市、大学は京都で暮らし、就職で札幌に来て三年間勤務しました。

就職したのは「ぎょうせい」という出版社で、内勤事務をしていました。開発課という部署に所属し、入社してから一、二年は平成の大合併のときで、市町村の合併支援業務や総合計画策定業務、福祉関係の調査研究、講演会の講師派遣など多岐にわたって様々な仕事を体験することができました。私は抜けているところがあるので、いつも数多くの上司、先輩方に助けてもらい過ごしてきました。こうした経験が議員にチャレンジする土台になったと思っています。

入社して二年目、仕事が終わった後に札幌学院大学の地域マネジメント研究科で学び、そこで江別市役所に勤務する寺島さんという女性職員と出

会い、いろいろな話をするなかで、自分はどこに軸足を置いてこれから生きていけばいいのかを考え、生まれ故郷の雄武町に戻るきっかけになりました。

人との出会いから故郷の魅力を再発見

雄武町に戻ってからは、実家が曾祖父の時代からつづく鮭定置網漁業ということもあり、ホタテの稚貝養殖、定置網の鮭選別などの仕事をして過ごしていました。浜での仕事はとても楽しく、血がたぎるような感覚がありました。

そうしたなか、名寄市で飲食店を営む方からスモークサーモンの作り方を教えてもらう機会があり、雄武の浜で捕れたサクラマスを使ってスモークサーモンを作るきっかけになりました。札幌学院大学にかよっていたときに先生から、北海道とスコットランドは地理的環境が似ていると聞いたので調べてみると、スコッチウイスキーの樽材を



使ってピンクサーモンでスモークサーモンを作っているロナルド・スミスさんという方がいるのを知り、連絡をしてスモークサーモンの作る工程を見学させてもらいました。私は、冬の張り詰めた寒さのなかから薫るスモークウッドの香りが大好きで、これはこの雄武という地域に住むことの幸せを再認識させてくれるものです。

浜仕事を通じて、小中学生のころには知らなかった多くの方に出会うことができました。そうしたなか、酪農ヘルパーをしていた男性と知り合い結婚し、夫は漁業を継いでくれましたが、漁業の仕事が合わず、二〇一七年の暮れ、曾祖父の時代からつづけてきた鮭定置網をやめることになりました。

同じころ、新聞でWWFジャパン（世界自然保護基金）のオーシャンチャレンジプログラムがあることを知り、これは海洋環境や水産資源に配慮した持続可能な水産業を促進する取り組みで、このプログラムに参加することができました。発表会で報告し、デイスカッションするなかで、自分が思っていたよりも、生まれ育った雄武とそこに住む人に対して強い思い入れがあることに気づくきっかけになりました。

雄武町を好きになつてもらったため立候補

そうしたなか議員に挑戦したのは、父からの後押しの一音でした。二〇一八年五月に町議会議員

の補欠選挙があることを父が知人から聞き、私にチャレンジしてみたらどうかと言ってくれ、補選に立候補しました。

議員の活動を通して作っていききたい未来は「住んでいてよかった！雄武をもっと好きになった」と地域の方に思ってもらうことです。議員の仕事をまちのひとに身近に感じてもらうために「オホーツクおむむ通信」を発行して、どんな活動をしているのかお知らせしています。また、住民同士の議論が活発になるためにも、私自身ファシリテーターの技術を磨き、将来的には女性を対象にしたまちづくりのイベントを開催したいと思っています。

そして地域経済分析システム（REASAS、リィサス）を活用してまちづくりに生かしていきたいという希望を持っています。七月には北海道経済産業局の方が雄武町に来て、地域を分析してもらう機会を得ました。

さまざまな人と協力してまちづくりを

議員としてやりたいことたくさんありますが、これから大切にしていきたいことは、議員同士や役場の方とのつながりです。私はまだ三〇代後半で十分な社会経験がありません。町議会にはさまざまな仕事や社会を経験された方がいますし、四

月の統一選で新しく議員になったなかでは、元商工会の事務局長だった方、自衛隊を退職して雄武町に戻ってきた方、雄武町で地域おこし協力隊を

三年経験して議員になった方がいます。まだ微力ではありますが、まちの皆さん、議員のみなさんとも力をあわせて議員・議会活動をしていきたいと思えます。

会場にお越しの皆さんに少しでも役立つことをと考え、地域経済分析システム、リィサスについてお話しします。道経産局の職員が来町し、観光開発の側面からリィサスで分析してもらいました。リィサスはパソコンで利用登録することによって、誰でもが様々なデータを使うことができるようになり、いろいろな地域分析が可能になります。

今回の分析で私にとってインパクトがあったことは、二六年後の二〇四五年に、雄武町の人口は現在の約半分の二〇九五名になることです。急激な人口減少を見据えたうえで、喫緊の活動をしなければならぬという新たな気持ちになりました。

最後に、夫が漁業をやめる一年ほど前から、インターネット上のオンラインサロンで経済評論家の勝間和代さんのコミュニティ「勝間塾」に参加し、日本全国そして海外にいる人と交流し、いろいろな情報と接することができます。議員の活動にも役立っています。

最後までお聞きくださりありがとうございます。

子ども達が笑顔の食卓を増やすために

札幌市議会議員
碧 ひろみ

私の原点

四月の札幌市議会議員に初当選し、自分でつくった動画をSNSで流しながら選挙活動をしていました。そうしたことも含めながら、なぜ私が議員になったのかをお話しします。

議員になる前年の二〇一八年、私は栄養士として給食会社に勤める会社員で、食事を作ったり献立を考える仕事をしていました。病院や老人ホーム、中学校などの栄養士を経験し、札幌市内の実業団陸上部の寮母兼栄養士をしていました。

朝七時半に二〇人分の朝食を提供するのに、一



人仕事なので朝五時には厨房に入って食事をつくりました。このため、三時半に起きて家の支度をし、四時半に自宅を出て、五時半に厨房に入るという仕事で大変でした。

陸上部選手の食事をつくり、選手が結果を出す、という仕事にやりがいを感じていましたし、誇りをもっていました。緑の下の力持ちという仕事ですが、いつか選手がオリンピックに出てカメラの前で「金メダルがとれたのは、ひろみさんの食事のおかげです」と言ってくれないかな、という願望があり、内心ではそう思っていました。

みんなが健康に生活するため、活動を始める

陸上部の食事は朝食と夕食をつくる仕事だったので、一〇時から一五時まで「中ぬけ時間」がありました。仮眠をとってもいいのですが、眠るのももったいないので、活動時間に充てました。

栄養士として献立を作るのが得意だったので、献立の立て方が分かれば働く女性の食事作りが楽になれると考え一般の方を対象にした「献立塾」をつくりました。最初は知り合いに声をかけ、それが

口コミで広がって教えてほしいという人が増え、個別指導のようにして献立塾を運営していました。

歯を大事にすることは健康を守ることにつながり、食事を楽しんで生活するには歯が大切です。歯科衛生士さんが栄養の知識を身につけたら患者さんも喜ぶと思い「デンタル献立塾」を考えました。

健康的に生活するのための日常のクセをみつけて、自ら健康になればいいと考えていました。栄養指導は、これを食べなさい、こうしなさい、と言われないことが多い。私は、自分のクセを自ら見つけて、自分からやってみようと思えるようにしてあげたいので、「栄養コーチング」を考え教えるようになりました。

いろいろなところでランチ会といった集まりがあるので、こんなことをやっています参加しませんかとチラシを配り営業もしました。

突然の出馬要請

このような活動をしていると、面白いね、パワフルだね、と関心をもたれいろいろなところに呼ばれるようになりました。労働組合の健康セミナーや私立高校の部活生徒への栄養講座。道内各地のスポーツ少年団で保護者へのアスリート栄養講座、歯と栄養をテーマにした視覚障害者むけの栄養講座をしたときは新聞でも取り上げてくれました。そして老人クラブなど、市民の方へ「健康と栄養」を普及する活動を行うようになっていきました。

こうした活動をしているころは、政治につながることは全く思っていないませんでした。政治と生活の関わりを考えることのない、無党派層の典型でした。

二〇一八年の夏、私のSNSへの投稿や栄養講座を見ていた方から、今度の札幌市議会議員選挙に出てませんかと唐突に言われましたが、市議会議員や政党のことはよく知らないし、選挙の準備をしていたわけでもないので、できませんと断りました。でも、声を掛けられて、うれしい気持ちもありました。

立候補を決めた三宅由美さんとの出会い

その後も、「いままでの栄養にかんする活動を市議会に反映してほしい」「市議になっても変わらずいまのままやってほしい」と立候補を説得され、徐々にやってみようかなという気持ちになり、札幌市議の三宅由美さんと市議会副議長室でお会いすることになりました。三宅さんは四期一六年議員を務めて引退することを決めていました。副議長室で迎えてくれた三宅さんは、とても輝いて、若々しくみえ、そして女性が副議長になつて七〇歳まで活躍していることに驚きました。今までのことをやりつづけていけば、私も三宅さんのようになれるかもしれないと思いました。

三宅さんは私に、「食と健康はとても大事なことでだから」「子どもと食は市議会でも大事なテーマ」「あなたの生き方を明るさを市政に生かして」

といわれ、立候補を決意しました。それから、政治の勉強を一気に始めました。

自分の理解していないことを話すことはできないので、できる範囲のことから街頭演説を始めました。初めての街頭演説は「皆さん今日の献立はなんですか」と発しました。政治家は「何かを変える」という人だけがやるのではなく、市民感覚を持った人がチャレンジできるのです。

食から市民と政治をむすぶ議員へ

市民のなかには、いまが幸せだから現状を変えなくていいと思っている人もいます。いまを変えたいという強い思いがなくても、自分が少し変わって政治の世界に入ったら、何かを発見できると思いつながらやるのもいい。

多様性のある社会が求められていますので、必

私はなぜ議員になったのか 基調報告3

一人で心配しての行動が、人とつながって議員に

ずしも、何かを変えなければというのではなく、私のように政治と関わりがなかった人が政治の世界に入れば、より多くの人が耳を傾けてくれるのではと思っています。

これまで栄養士として食の安全についての活動してきましたが、今後は地域で子ども食堂や出前講座などで食の楽しさを伝え、私らしい感覚で議員活動をしていきたいと思っています。そして議員になっても、ライフワークとして、食を追求していきたい。安心して笑顔で食卓を囲み食事ができる幸せとは、広く考えると平和を守ること、平和を築いていくことにつながることで。笑顔で食卓を囲む意義を多くの人に伝えるために、議員になったと思えるようになってきました。

なぜ私が議員になったのかというと、笑顔の食卓を増やすためだと感じています。

北広島市議会議員・市民ネットワーク北海道

佐々木 百合香

私の原点

私には娘二人と息子が一人います。もともとは

専業主婦で、のきななお母さんとして、家とスーパーと図書館しか行き場がないような生活をしていました。

少し私の生い立ちをお話します。一九七九年、

胆振管内虻田町（現在の洞爺湖町）で誕生。小学校四年生のときに両親が離婚し、母方の祖父母と高校三年生まで一緒に暮らしました。

金沢工業大学工学部環境システム工学科へ進学し、測量やダイオキシン類や水の汚染などを測る環境計量、発電などのエネルギー、渋滞の緩和やライトアップの効果、音環境などを学際的に学びました。専門としては水道水、下水処理水の消毒副生成物の研究室に所属し、公衆衛生やリスク管理について学んできました。思えばこの学びがのちに市民活動や政治活動に向かわせたきっかけだったと言えるでしょう。

消毒副生成物という用語はなじみがないと思います。水道水は浄水場で作られます。川や湖から水を集め、砂やごみを取り除き、飲める状態にするために消毒します。このとき消毒に使われる塩素と水に入っている有機物が反応してできるのが、消毒副生成物と言われるもので、発がん性のある物質もあります。水道水には少ないとはいえ消毒副生成物が必ず入っています。

それでは消毒しない方がいいと言う方もいますが、消毒をしていない水を飲むと、下痢になったり、感染症になったりします。どちらを選択するかになります。私たちの社会は消毒することを選びました。消毒をした水を飲んで痛になるリスクと、消毒をしていない水を飲んで病気になるリスクを比べるにはどうすればいいのでしょうか。

リスクの大きさは、(リスクの起きる確率)×(被害の大きさ)×(母集団の人数)で比べることができます。消毒していない水を飲むと無視できない確率で感染症にかかってしまうので、日本の水道水は蛇口から出る時点で消毒作用のある塩素が残るよう水道法で定められています。リスクの大きさを比べるには、同じ種類のリスクと比べなくてはなりません。

自然災害がきっかけとなって

大学三年生のときの二〇〇〇年三月、有珠山噴火があり、五月の連休に虻田町に戻ってボランティア活動をしました。このときの活動をきっかけに夫と出会い、大学3年生の終わりに学生結婚をしました。その後、子どもたちも生まれ、専業主婦の生活を過ごしていました。

そんな暮らしが一変したのは、二〇一一年三月一日の東日本大震災です。刻々と飛び込む被災地のニュースや原発事故をうけ、娘たちに安全なものを食べさせたいと悩む日々が始まりました。しばらくすると不思議な報道が始まりました。

「風評被害」「食べて応援」「心の復興」「放射能がない所へ避難するより、みんなで一緒にいたい」との報道が出てきて、リスクと心の安定、リスクとお金を比較する風潮が始まりました。さきほど申しあげたように、リスクは同じリスクと比べべきものなのに「心の安定」や「お金」とリスク

を比べるのはおかしい事です。

放射能によるリスクを軽減するために私たちや社会がするべきことは何か、と真剣に調べ、行き着いた一つの結論は学校給食です。学校給食はたくさん子どもたちが日常的に食べている「社会的なごはん」ともいえるものです。

給食食材に放射能汚染のないものを使うことによつて、子どもたちに新たに加わるリスクを抑えることができます。たとえば原発事故前のコメはたくさんあるはずですから、それがなくなるまで古いコメを食べ続けていいじゃないか、などとレポート形式の要望書を作り、北広島市の学校給食センターに提出しました。

後日、給食センター長と駐車場で偶然会い、立ち話でしたが「佐々木さん要望書もらったよ、なるべく気をつけているから」と言われました。突然、不意打ちのように回答がくるとは思っていなかったのです、思わず「はい」と返事をしてしまいました。



帰宅してから冷静に考えてみて、どのくらい気をつけてくれるのだろうか、ともややもやした気持ちになりました。そんなときに、札幌市で給食食材の放射能検査を求める署名が始まると聞きました。札幌市が測定を始めれば、北広島市でも測定をするのではないだろうかと期待し、署名を準備していたお母さん方と一緒に署名活動に取り組むことになり、九日間で五一〇八筆の署名を集めることができました。

札幌市議会の九月定例会で市民ネットワークの小倉菜穂子議員が質問で署名活動を取り上げ、さらに上田市長の定例記者会見で道新記者が放射能検査を求める署名の質問がありました。給食食材への市民の関心は高く、札幌市は二〇一一年一月から給食食材の放射能測定をはじめ、現在でも月二検体の測定がつづいています。

ひとりで悩まず、みんなとつながる

こうした経験を通して、一人で心配して、一人で行動するよりも、人とつながることで、可能性が出てくることを学びました。では、地元では誰とつながったらいいのだろうかと考えていた時、当時北広島市議だった市民ネットワークの田辺優子さんを紹介され、自宅を訪ね、思いの丈を話しました。その後、田辺さんは二〇一一年一二月定例会で、給食食材の放射能検査などの市の取り組みについて質問し、私も傍聴に駆けつけました。

北広島市内でも署名活動を行いました。目立った展開にならなかったのですが、自分たちで測定してみてもどうかと考えるようになりました。札幌で市民の放射能測定所をつくる動きが出てきたので準備会に参加。二〇一二年五月、「さつぽろ市民放射能測定所 はかーる・さつぽろ」の開所にこぎ着けました。いまま月一回程度測定所に行き放射能測定をしながら、はかーる・さつぽろが運営する「西岡コミュニティ&カフェBaro(パロ)」という地域の方々の交流の場で活動しています。

二〇一六年には「放射能だけでも嫌なのに、戦争になりかねない動きは嫌だ」と安全保障関連法案に反対し、様々なデモや集会に参加しました。法案が通ってしまったときは、呆然としてしまい、私の子どもが大人になるまでに、どんな社会になっていくのか不安に思いました。二〇一六年四月の衆議院道五区補欠選挙では無所属の候補を応援し、一人の母親として、一市民として気持ちを話す機会を何度もいただきました。

補選のあと、市民ネットワークの活動に誘われ、継続的に関わるようになりました。政治活動ややるんだと思ったら、町内会やPTAの活動もやれるのではと思い、役員を引き受け地域で活動するようにもなりました。

市民ネットワークの代理人(議員)は同じ人が長く続けるのではなく、交代しながらつなげて活動なので、原則二期八年、最長でも三期一二年で次の人にバトンタッチします。そして昨年「佐々

木さんに受け継いでほしい」と打診されました。私は裏方で関わっていられば良いと考えていたので、戸惑いました。

家族の理解を得て裏方から表舞台へ

まず家族に相談しました。夫は笑いながら受け入れてくれました。高校二年生の長女からは「いいんじゃないの、お母さんは悪いことをしなさんさうだし」と言われ、中学生の次女は「好きにすればいいよ」、長男は幼稚園の年長で、特に感想はないようでした。同居している母には「あなたは、いつも家にはいないであちこち飛び回っているのだから、行き先が変わるだけで同じようなもの」と言われ、こんな打診を受けるのも一生に一度のことだと思ひ、チャレンジしました。

選挙期間中には「児童館未整備地域に子どもの居場所を」「建て替えが計画されている新しい学校給食センターへ子どもや保護者、働く人の声を反映」私の住む団地地区をはじめ、高齢化のすすむ北広島市の状況をうけ「高齢になっても安心して暮らせるまちづくり」有珠山噴火の経験から、「防災にはたくさんの目線を取り入れる」等の政策を訴えました。

また、現在北広島市では、ボールパーク構想が前にすすむ強い意思のもと動いていますので、その中で忘れられていること、気づかれないことがあると思ひ、自然との調和や財政のチェックを訴

えました。

市民目線を持った代理人として

これらの訴えに共通していることは生活者の視点を大切にすること、そして小学生・中学生・高校生の母として、子育て世代の実感を市政に生かすことです。

当選後初めての一般質問では「新しい学校給食センターについて」そして「子どもの居場所づくりについて」をとりあげました。

これからやっていきたい事としては、これまでと同じように子育て世代と近いところで活動し、「子育て世代の声を議会・市政に届けていくこと」「高齢化率の高い団地地区の課題や、高齢化に向き合うこと」「ボールパーク構想の点検」、そして市民の代理人、代弁者としての気持ちを忘れずに活動することです。

放射能測定の活動を七年続けていますので、放射能汚染防止法の制定に向けて私たちにできることを取り組んでいきたいと思っています。

福島原発事故以前は、一キロあたり一〇〇ベクレルを超えたものは放射性廃棄物と言われていましたが、いま東北地方ではそれ以上の値で、しかもセシウム137を含んだ表土が広がっている状況です。また、放射能汚染された土壌などが公共土木事業などで再利用されようとしています。再利用による放射能の拡散を防ぐために、放射能汚

染防止法の制定に取り組んでいきます。

今回の北広島市議選挙は過去最低の投票率でした。これは議会と市民の関係が遠くなっているからで、議会から市民へのアプローチが必要不可欠です。市民は忙しく、議員と会ったことがない人も多い。また、市民それぞれに抱える不安や疑問、不満があるけれども、それらの課題が市議会での議論とリンクしてこない。これがリンクした時に市民が議会に対して関心を持ち、市政にも関心を持てるのではと思います。今回、議会広報編集委員になったので、どういう議会だよりがいいのかなど、市民に伝わる方法を考えていきたいです。

好奇心を忘れずに

これから、自分がどうありたいかについてお話

私はなぜ議員になったのか 基調報告4

生活そのものが政治、家庭の声を市政に

恵庭市議会議員

新 岡 ちかえ

して終わりにします。私には困ったときに立ち戻る「枯れない好奇心を大切に」という言葉があります。調べること、学ぶことの原動力は好奇心です。知ることが楽しい、違う景色を見てみたいという好奇心を大切にしていきたい。

市民ネットワークの代理人は、最長でも三期一二年という限られた時間です。限られた時間で何ができるかと考えたときに、人は活動的になれるものです。限られた時間を大切にしたい。

自分ひとりで見られる世界はほんの少しです。他の人が様々に経験したことを聞くのはありがたいことです。聞かせてもらう話を大切にしていきたい。毎日が勉強です。一生懸命にやっていきたいと思っています。

私の原点

自己紹介を兼ねて私の経歴をすこし触れます。

一九七〇年、芦別市で生まれ、その後富良野市に

引越して富良野高校を卒業しました。中学、高校とスポーツの部活に明け暮れて勉強をしなかったため、大学受験に失敗し、一浪したあとも受験に失敗したため、公務員試験を受けて、小樽郵便局に勤務することになりました。



公務員となりましたが、大学で学びたい気持ち
が強く、働きながら小樽商科大学短期大学部（夜
間コース）に三年間通い、選ばれて昼の大学に
編入する制度があり、選ばれました。当時はバブ
ル経済がはじけた時期でしたし、公務員は安定し
た仕事なので迷いましたが、小樽商大は英語教育
が充実しており、英語を学ぶために商大を選んだ
ので、思い切って退職し、大学に進学しました。

大学にはトータルで五年間かよって一九九六年
に卒業し、その後、民間企業に勤めました。大学
の同期生よりも長い時間かけて卒業しましたが、
ゼミの授業も楽しく過ごし、とてもいい経験をし
たと思っています。一旦就職してから大学にす
んだので、働くことの意味について自分なりに考
え、深く問い直す時間をもらいました。

当時、小樽郵便局には二八〇人以上の局員がい
ましたが、女性の正規職員は九名ほどでした。私
が局に在籍したのは三年間でしたが、女性の管理
職に会うことはありませんでした。仕事と家庭の

どちらをとるかという選択を迫られたときに、家
庭をあきらめて仕事を選ぶという選択肢が私の目
の前にロールモデルとしてなかったため、それは
できない。家庭と仕事のバランスをいかにとつて
いくのかを問い続けた大学の二年間の時間です
た。それがいま議員になる上でも基礎となる部分
核としてあるものです。

地域活動から政治・議員の重要性を知る

議員に立候補したきっかけの一つは、今日、皆
さんにお配りしたリーフレットにも書いてありま
す。一〇年前、新興住宅地の黄金地区に小学校が
建つ予定でしたので、私たちはこの地区に住むこ
とにしました。ところが、市は財政難を理由に、
小学校の新設を撤回し、白紙に戻しました。学校
ができて子どもにとって環境のいいところなる
と思つて移り住んだ子育て世代が多く、これまで
活動をしたことのない母親の集まりでしたが、小
学校を地域につくってほしいと、一筆、一筆署名
を集め、学校の新設を市に求める活動をしました。
それまでは、政治に関して無関心でしたが、生
活そのものが政治だということに気づかされた出
来事でした。さらに、市議会のなかで議員の存在
の大きさを実感しました。議員と一緒に署名活動
する 때가 あり、市民の立場にたつて議会のなか
で主張してくれる議員は少数でした。当時、二十
数名の全議員のなかで、私たちと思いをともにし

て議会のなかで闘ってくれた議員は三名でした。
そのとき闘ってくれた議員との出会いが、私を議
員になる道をつくつたと思っています。

こうした学校建設を求める活動を経験したから
といって、議員に立候補しようとは思っていま
せんでした。その間の活動としては、東日本震災で
の福島原発事故の放射能汚染から子どもを守るた
めに、必死になつて避難している母親たちの姿を
みて、原発はとんでもないものだと思います。

恵庭原発ゼロの会という集まりがあったので、一
市民として参加しました。普通の市民からみると
政治的な活動と見える会に参加する人は少なく、
少しでもこの活動をお母さん方に広げたいとい
う思いで、ごく普通の市民で主婦の私が会の代表を
四年間務めました。重荷に感じたこともありまし
たが、沢山のことを学びました。

私を動かした子どもたちとの出会い

また一方で、子どもを二人育てながら、急に思
い立って教員免許をとりました。地元恵庭の高校
定時制の英語の非常勤講師として二年半くらい教
え、そのときの子どもたちの出会いが、私の人生
に大きな影響を与えました。

定時制に通う子ども達は、一般の家庭で育つて
きた子どもとは違って、過酷な環境のなかで育つ
てきた子がたくさんいます。普通の環境で育つて
いれば、それほど苦労せずまっすぐに成長できた

のだろうけど、そうした環境になくてもやつぱり勉強したいという思いで集まってくる子どもたちを目の前にして、政治を動かしている場、もっと住みやすい社会にするためには、教育が大切だと痛感しました。

自分の頭で何がいいのか悪いのか自分の意見を持つ、そういった教育をいまの時代されていらないのではないかと、という疑問を持つていましたので、これからの社会を担う子ども達には、自分の頭で考えて自立して自分の足で立つて歩いていくことができる教育の環境を大人の責任として用意してあげたい、という思いを強く感じました。

政治を身近にするため立候補

小学校の建設問題から一〇年かけて、いろいろな経験を通しながら、ずっと応援していた議員から、一緒に議員をやりませんか、と声を掛けられ、私のなかでも機が熟したというか、腹が固まったといいましょうか、そうした経緯で選挙にでました。

組織の後ろ盾もないなか、選挙に出ると表明したのは、市議選告示一月前の三月一四日で、必死に準備しました。今回の選挙でやりたかったのは、市民に身近な選挙にすることでした。政治や選挙が市民から離れていると思っていました。選挙運動一つとっても、一部の人のまつりごとのように映り、普通の主婦は一体何をやっているのだろうか、

と冷めた目で見ています。

政治に無関心な人を一人でもいいから巻き込もうと、選挙に全く関心のないママ友を無理やり応援団長という後援会の会長になつてもらつて一緒に回りました。お金をかけない手作り選挙で頑張り、タスキをはじめ何でもお母さん方の手作りで、選挙カーに掲示する候補者名も模造紙を貼り付けました。選挙に慣れている人からみると、選挙を戦う気があるのかと思われたかもしれせん。

これまで選挙に関心なかったお母さん方が応援してくれ、政治に興味をもつたよ言ってくれる同士というか、仲間をつくれたことは、私の選挙戦の宝物になりました。

市民の声を聞き、寄り添える議員へ

今後議員としてやりたいことは、ささやかなこと、小さなことでもいいので、一つ一つ地道に実現していきたいと思つています。選挙リーフレットに載せた公約は、子どものことだけでした。支援者のなかには、全世代に訴えられる政策をちりばめたほうがいい、との助言もありましたが、私がかたわっているのは子どものこと、私のなかにあるものしか自信をもって訴えられないとわがままでしたけど、貫きました。リーフレットにある政策を一つ一つ、着実に実現していきたいと思つています。

初めての議会となった第二回定例会では、選挙

公約の子どもの命を見守る「産科医院の誘致」と、同じく子どもの成長を見守る「中学校部活動の外部指導員の充実」を盛り込み三項目を一般質問し、今後も粘り強く取り組んで行きたいと思つています。

まわりの議員の方をみて学ぶことはたくさんありますし、まだまだ知らないことが多く、ようやくと定例会が終わつた、という感じでした。これからも、自分のなかで大事にしていきたいことは、当事者の声をしっかり聞いて、共感する力、感性をみがき、疑問に思うことについては全力で問題解決に当たつていきたいと強く思つています。

私の議員活動は、困っている人の声を聞き、そして寄り添つて、真摯に地道に着実に行動していきたいと思つています。この四年間は力をつけ、自分が志した初心を忘れずに活動していきます。

議員のなり手不足は若者が政治に参加するチャンス

浦幌町議会議員
沼尾昌也

私の原点

私は二〇一二年三月、帯広市の高校を卒業して、四月にJR東日本（東京）に入社し、五月から山野駅で駅係員となり、六年間JRで仕事をし、最後は山手線の車掌を務めていました。二〇一八年六月、JR東日本を退社して浦幌町に移住し、農業に従事しています。

JRの福利厚生は充実し、給与は満足していましたし、休日もしっかりありました。会社を辞めるとき、同僚からはどうして辞めるんだ、若いんだからもう少し働きつづけては、と説得されました。



た。山手線の車掌を務めて、基本的な流れとしてはその後運転士になり、支社に行く流れです。駅係員、車掌、運転士は専門職なので、この経験をほかの仕事に生かせない職業なので、早めに決断したほうがいいと思います、二四歳で退職しました。昨年、農業に転職し、今年選挙にでることにしました。

民間があれば議員はいらない？

議員になる皆さんのきっかけは、地域をよくしたい、自分が理想とする地域にしたいという思いで、地域を悪くしたいと思う方はいないと思います。

私は二五歳で町議会議員に当選しました。選挙に出る際、二〇代の若い友人たちに応援されましたが、民間でやったほうがいいのでは、という声が多々ありました。民間でできるのに、なぜ議員になるのか、というのが若い人の率直な意見です。地域をよくするのはいろいろやり方がありますけど、たとえば地元の人を呼びたいので、観光をやるとすれば、観光は行政だけでなく民間でやっています。あるいは子育ての分野は、行政でなければできないこともあります。民間で行えるこ

とも多々あります。

友人といろいろ話しをすると、選挙にいかなければならぬのが面倒とか、選挙にいつても変わらないでしょう、ニュースをみても国会議員は文句ばかり言っている。議員や政治は税金を使って仕事をしているので、町民の意見を聞かなければならないけど、民間であれば、自分のお金を使うので自由度が高い。民間でやればいいじゃない、と言われてました。

政治を活かす若者になるべく立候補

「なんで政治なんだ」からはじまり、私は変人だと言われましたが、会場にいらしている方は、議会、政治に関心のある変人の仲間で心強いですし、地域をよくする手法、やり方は自由で、私は政治の分野でやろうと考え、選挙にでました。

米国の非営利団体が公開した選挙キャンペーン動画が話題になりました。高齢の人が、若者よ投票しないで——と呼びかけ。高齢者は「富裕層への税金がカットされたらどうか？最高だよ。俺たちは金持ちだから」「温暖化、それはあなたたちの問題よ。私はもう長くないから」「学校での銃撃事件悲しいわね。けど私は五〇年間学校に行っていないわ」「でもおまえらは投票しやしない。若い人はみんな投票しない」「でも私は投票する。ありとあらゆる選挙で」「俺たちは間違いなく投票する。だがお前らは投票しない」「なぜって俺たちは行動する世代だから」といった動画で若者

に投票を促す内容で、日本でも話題になりました。投票をはじめ、政治という手法を使って、自分たちの思いを実現しようとする若者は少ない。今回の参議院議員選挙は、若い人ほど投票に行かず、政治という手段を使って自分の思いを実現しようとする行動が少ない。政治を活用しようとする若者が少ない。これが私が政治で行うことの理由です。

起業だとか、どこかの企業に就職するとか、NPO団体で活動するというやり方ではなく、私が政治でやる理由は、若い人が政治に関わらないからです。自分が政治という手法で何か物事をすまていこうという思いで選挙に出ました。多くの若い人が政治でやろうと思うのなら、自分が政治をやる必要はないと思いますが、もともと関心があつたので、政治でやることを決断しました。

なり手不足はチャンス

政治は年齢層に関係なく必ず関わるものです。納税の義務は誰でもあり、消費税を払ったりして多くの人が税金を納めています。そう考えると若い人も政治の世界に入っていし、若い人の声を政治に届けるという人がいなければならぬので、そういった気持ちで選挙にでました。

友人に選挙を手伝ってもらい、みんな初めての経験で、政治・選挙でこうなっているんだね、と新鮮な声を聞いて、選挙に出た意味があつたと思いました。

当選して町民の方から信任を得たので、大事な

のは当選したこれからです。選挙を通して若い人に政治の関心を持つてもらっただけでなく、これから自分自身何ができるのかが重要になってきます。

浦幌町議会は前回二〇一五年四月の選挙では、一議席の定数割れとなり無投票でした。今回は、議員のなり手不足対策の成果もあつて選挙なりましたが、各地で議員のなり手不足問題が深刻な状況です。

でも私はなり手不足をあまり悲観的に見ていません。やる気のある人が、やりやすい、立候補しやすい環境になつているので、なり手不足は好機だと捉えています。かつては、地盤、看板、鞆というように、お金がなければ、地縁がなければ議員になれないと言われましたが、なり手不足はそうしたことは関係なくなりました。

私は浦幌町に移って一年経たずして選挙にでました。若い人が少ないこともありますが、町民の方から期待されていきました。若い人にとってはチャンスだと思えます。

町民との交流を続けて、政治・議員を身近な存在に

今回当選した新人議員四名で「浦幌の明日を考える会」を結成し、七月二〇日に「もつと、近づこう」をテーマに、町民との交流会（活動報告会）を行いました。新人議員の年齢は栗山博文議員三六歳、高橋匠議員三九歳、伊藤光一議員四六歳、私が最年少で二五歳です。報告会の目的は①

町民の声を聞く②町民の声にこたえる③町民の声に道筋をつけるの三つで、定例会ごとに開催したいと考えています。

町民の声を聞くのは当たり前前で、町民の声を定例会での一般質問に反映し、定例会後の報告会で質疑内容と今後の方向性を説明していきたい。まちの財政は限られており、町民の声や要望があるからと、私たちがその全ての実施を行政に求めるのは不可能です。自分たちでやらなければならぬ課題は批判を恐れずに町民に伝え、行政がやらなければならぬことは徹底して求めていくようにし、その道筋をつけていきたい。

町民の声を集め、整理し、それを元に議会での質問・提案し、町行政の答え・対応を次の交流会で報告する。そして次の議会でも継続して質問・提案する。一方、町が行うのが妥当ではなく、自分たちで実現できるものはやっていく。

町民にとつて政治を身近なものにするのは、このような交流会を定期的に開催し、町民の声を聞き、それに対して説明することです。さらに、事態が動いていなくても、委員会や議会での議論内容を町民に説明することが必要だと思います。

最後ですが、政治という手法は、立候補することだけではなく、投票もそうですし、政治という手法を使って何かやってみようかな、と若者が思えるように、政治が身近なものになればいいと思っています。そして町民に政治が身近になるよう、議員、議会の活動をやっていきたい。

私はなぜ議員になったのか

遠藤 友宇子 雄武町議会議員

碧 ひろみ 札幌市議会議員

佐々木百合香 北広島市議会議員

新岡 ちかえ 恵庭市議会議員

沼尾 昌也 浦幌町議会議員

司会 渡辺 三省 議会技術研究会共同代表

渡辺 これからディスカッションをすすめていきます。遠藤さんは昨年の補欠選挙で当選し、今年四月の統一選で再選されましたが、議員になって二年目なので今回初当選の皆さんと同じ状況にあるといえます。五人の新人議員の皆さんから報告をいただき、新鮮な気持ちといましようか、改めて議会の可能性を感じました。

浦幌町議会は前回選挙で欠員が出て無投票でしたが、今回は新人六人が立候補して選挙になったのは、町議会のなり手不足検証の取り組みの成果だと思います。今日の道新朝刊（七・二七）で、芽室町議会が全自治体のなかで議会改革度五年連続一位と報道されています。全国の町の上位一位には、芽室町のほかに栗山町、福島町、そして浦幌町の各議会が名を連ねていますが、道内町議会は改革が積み重なったうえでの実績といえます。

そしてこの議会改革の紹介の隣に、北海道議会新庁舎の自民党派での喫煙所設置をめぐるの記事が掲載されています。これは議会での政党会派の負の側面が表れていると思います。議員の多い道議会や札幌市議会の内情をみると、実は硬直した議会運営、慣例による議会運営で、住民から離れた議会運営に見えます。

道議会、札幌市議会ともに議会基本条例を制定していますが、道議会においては、喫煙所設置をしないことすら決められない状況、あるいは札幌市議会においては、五月の議長選をめぐる議会運営の迷走と議員の懲罰・除名問題への対応を見るにつけ、議会が変わったととてもは言えないという気がしています。一方、小さな議会でも議員の

高齢化や、期数を重ねた議員の発言の大きな影響力など、議会全体が新しい風を受け入れられないといった問題も見受けられます。

先ほど基調報告で、佐々木さんと新岡さんから、市民の関心と議会議論が連動していないこと。さらに、新岡さんは活動のなかで議会が力になってくれたのはごく少数の議員だったこと。個々の議員は頑張っているけど、議会として総合力を発揮するのは難しい実態が見てとれます。橋場さんからも議会の総合力の発揮というお話がありました。

新人議員が感じた議会の姿

渡辺 皆さんは議員になって間もないのですが、議会運営が硬直していると思われること、慣例による運営のため住民から離れた議会運営と感じたことがあったでしょうか。それぞれお願いします。

遠藤 今年四月の選挙では新人議員三人が当選しました。一人は以前、自衛隊にいた方で、東日本大震災のときに東北の被災地で救済、復興・復旧に携わっていた経験を持っています。地域おこし協力隊で活動していた人は、東京からのUターンです。ほかのまちでの経験を、雄武町で生かしてくれると思っています。

碧 選挙後の札幌市議会臨時会は議長選出を巡って空転し、こうした混乱がないと議会という場は注目されないのだろうか、と思いました。議員の懲罰・除名で揺れた六月定例会は、傍聴席に詰めかけた市民から、野次と怒号が飛ぶほど注目を集めた議会でした。



写真左から、司会の渡辺さん、遠藤さん、碧さん、佐々木さん、新潟さん、沼尾さん

ところが普段の議会は傍聴する人は少なく、市民はあまり関心がないように思われます。議会を傍聴してみたいと関心を持ってもらえるような質問を考えていきたい。さらに、私の質問内容をSNSなどの媒体を通じて知らせ、「こんな質問を

するから聞きに来て」と気軽に言えるような議会にしたら、いろいろな人に感心を持ってもらえると思います。

佐々木 北広島市議会では、会派に属さない議員がこれまで一名でしたが、今回、全議員二二名のうち五名と無会派が増えました。無会派の議員の皆さんからは、議会運営委員会など会派間の協議がおこなわれる場で発言できないのか。申し合わせで決まっていると言われても、申し合わせは私たちがしたものでない。前の任期の議員による申し合わせではないか、申し合わせが必要なら、今期の議員たち全員であらためて申し合わせるべきだとの訴えがあります。

現状としては無会派の議員はオブザーバーとしての出席、便宜上休憩時間に意見を聞く時間が設けられています。

まだ分からないことばかりで、議会はこういうものかと受け止めることも、本当はそうではないほうが良いのかな、という気づきを得ることもあり揺れ動いている感じです。

先ほど、市民の関心と議会議論がリンクしていないと話しました。選挙期間中は市民に一生懸命訴える一方、さまざまな方から、「これをなんとかしてほしい」とか、「あれは変だと思おう」とお話を聞かせていただき、普段は無関心のように見える方も、市政に対して色々思っている事があるのだとわかりました。それらの声を議会で取り上げて行政に伝えることによって、議会が身近な存在になる気がします。

新潟 初めての定例議会で教育委員会のことを質問しましたが、答弁では間違っている箇所がありました。

議会での答弁が間違っていたら、その本会議のなかで修正を求めるのが道理なので、会派のなかで動議を提出しようかとの議論になりました。しかし、議会が一致した意見にならないければ動議は認められません。こういった間違った答弁なので、ほかの会派に打診すると、動議には賛同できないと言われました。

議会が一致して動議に賛成せず否決されれば、間違った答弁に議会が承認を与えてしまうことになるので、今回は動議を出さないことにしました。次回の議会でも再度同様の質問をし、改めて正しい答弁をいただきたいと思っています。

間違った答弁になった要因として、議会質疑での緊張感が欠けているからだと感じています。事前に答弁のすりあわせをせずに、議会でやりとりをしたいと思っており、その中での答弁ですし、時間の制約があるなかで詰め切れなかった反省もあります。

理事者側に緊張感を持ってもらうためには、市民も議会の動きをチェックすることが重要だと思いました。今回は、私を応援してくれている市民の方が議会を傍聴してくれたので、市民と情報を共有して今後の動きを注視し、議会のなかに緊張感が生まれればと思います。六〇分間の一般質問時間をやり過ぎせよという理事者側の姿勢も変わると思います。まだ小さな力ですが、市民の方、ほかの議員とも情報と問題意識を共有して

やっていきたいと思っています。

沼尾 浦幌町議会の議会改革度ランキングは、道内でも上位にあります。議員になって三カ月経って感じるのは、議会としていろいろな取り組みをしています。議員活動が硬直化していると感じました。

議員活動が活発に行われていれば、いろいろと町民からの声に来て、その声を元に議会活動を活性化させることとなります。議会活動が活発にならないのは、議員活動が行われていないからだと思います。

浦幌町議会は議会のネット中継をしていませんが、若い町民からは、早くネット中継をしてほしいとの声があります。でも議会中継ができないのは、議会ではなく、議員活動が硬直化しているからだと思います。

議会と住民の交流、参加

渡辺 議員の活動は大切ですが、議会は合議制機関なので、どうやってまとまり、総合力としての議会運営・活動を行っていくかが重要になります。沼尾さんは議会ではなく、議員活動の硬直化ではないかとの指摘は、合議制機関とはいえず、個々の議員の集合体という意味においてなるほどだと思います。ただ、浦幌町議会全体としては、ほかの議会の参考になる改革をすすめていますから、意外な思いもしました。そういう意味では、新岡さんが言われたように、住民と連帯、課題を共有化していくことが、議会として必要なことです。

議会への住民参加、議会と住民の交流、住民の声を議会に活かすという点で特徴的な活動はあるでしょうか。浦幌町議会ではすでにいろいろな取り組みがあります。

沼尾 浦幌町議会への住民参加として、一つは「まちなかカフェD.E.議会」があります。スーパーマーケットや図書館などのコーナーで、飲み物やお菓子を用意して訪れた町民と議員が気軽にしゃべりをし、町民からいろいろな話しを聞くカフェです。団体や地区の町民と意見交換する「まちなかおじゃまD.E.議会」や、このほか年一回の議会報告会（町民との意見交換会）、町民の議会モニター制度など、町民が参加するいろいろな仕組み、制度があります。

一方、議会報告会にだけだけの町民が参加しているのか。町民が自主的にモニターになっているのか、まちなかカフェD.E.議会にだけだけの町民が参加しているのか。結局は個々の議員活動がどれだけ町民とつながっていて、参加してくれるのか。議員が知らせて、多くの町民に関心を持ってもらうのかにつながっていくのだと思います。

渡辺 議員としての住民への説明や、相談への対応のほかに、議会としての取り組みはどうでしょうか。議員個々の活動はもちろんですが、議事機関・議決機関としての議会の役割が発揮されなければなりません。

北広島市議会では、会派を超えた女性議員の活動が、議会活動に変化を与えていると、以前聞いたことがあります。現在はどうなっているのでしょうか。

佐々木 議会としての公的な活動ではありませんが、全議員で構成する議員会が主催した市内高校生との対話集会を二〇一七年、二〇一八年秋と二回行いました。いくつかのグループに分かれて、高校生と議員がワークショップを行い、若い人たちの政治に対する率直な感想や、まちづくりの思い、考え方を知る有意義な取り組みでした。継続できればと思います。

前の任期のとき議員定数二二名のうち、女性議員は七名で女性の割合は三二%と、道内市議会では歌志内市、江別市に次いで三番目に高い比率でした。保守系、民進系、共産、公明、市民ネット、無党派と会派を超えて一緒にやれることを、と集まりました。女性だけでおしゃべりをしましょうと市民の声を聞く「まちなかカフェ」を企画し、子育てや介護などいろいろなことを話しました。二〇一八年には女性議員全員で東北地方に防災の視察にいき、避難所での女性の視点からみた課題や対策を学びました。

女性議員の会には当初からの約束があります。特定の議員が目立つための活動でなく、女性議員全員が集まり、連携し、女性の視点で政策提言していこうというものです。

新人議員間の交流は

渡辺 ほかの議会でも新人当選議員は、新鮮な気持ちで議会に入ってきていると思います。政党会派を超えて新人議員が集まり、今後こういう活動したい、こういう議会にしたい、といったよう

な意見交換をしているのでしょうか。この点について、遠藤さんから順番にお願いします。

遠藤 新人議員が集まって勉強会が行われています。町の課長に来てもらい、町の財政状況などの勉強会を始め、これからも定期的に開催される予定です。

碧 札幌市議会は会派を超えた動きはありませんが、新人議員同士のつながりをつくるため、令和元年なので「R1の会」をつくらうかという声は出ています。

佐々木 新人議員の皆さんと交流し、情報交換したい気持ちがあるので、新人議員の集まりがあれば、是非参加したい。初議会が終わったばかりなので、これからかなと思っています。

新岡 恵庭市議会には七人の新人議員がいます。前回選挙ときに初当選した議員の方が立ち上げた「現場から学ぶ会」があり、そこに四名の新人議員が参加しています。一期目、二期目の議員一〇名で勉強していく会です。

沼尾 浦幌町議会に会派はなく、定数一一名のうち新人四名が当選しました。年齢は二〇代は私、三〇代二名、四〇代一名と若く、さきほどもふれましたが、一緒に報告会を開催しています。

議員になって行政の対応の変化

渡辺 一市民として行政に問いかけても、行政は素っ気ない面があったと思います。しかし議員は公選職なので、行政との向き合い方は、いままで見ていた景色と違うと思います。行政の対応が

変わったなど、議員になってからの変化はあるのでしょうか。率直な感想をお聞かせください。

今度は順番を逆にして、沼尾さんからお願います。

沼尾 議員になって大きく変わったことはありません。

渡辺 浦幌町は日頃から住民の方が町に問い合わせると、役場は真摯に対応しているということなのですね。新岡さんは活動されてきて、議員になって変わった点はあるでしょうか。

新岡 これまで、市民として行政に問い合わせる経験は結構ありましたが、議員になったことで、行政の側は何を聞かれるのだろうか、身構えている感じがあります。素朴に行政に聞きたいとおもっても、議会の質問で追及されるのだろうか、と身構えているようで、そうした変化は感じます。

佐々木 議員になる前、学校給食の要望書を出したときには、口頭で気をつけていくからの言葉をもらっただけでしたが、今回一般質問するときに給食センターの方とお話した際に、その言葉通り食品の安全に気を使ってくれていたことが分かったので、よかったですと思いました。でも、要望書を出したすぐ後にそれを知っていたら、すっぴん安心して政治に興味を持たなかったかもしれません。

碧 お尋ねのことはずれるかもしれませんが、当選してから感じのことは、いままで当たり前のように札幌市民として過ごしやすく暮らしていました。委員会に出席して感じたのは、議員と市の職員が真剣に話し合っているからこそ、札幌市は過

ごしやすいまちになっているのだと感じるようになります。

当たり前のように市民が生活できるのも、行政にいる職員が働いているからだと思いましたが、議員になって感じ、市民に伝えなければと思います。

遠藤 それぞれの課の担当者によって異なりますが、議員になる前後では、議員になってからの方が、町職員と気持ちが近くなったような気がします。まちのイベントのときは職員と一緒に活動する機会をつくり、役場職員とともに住みやすいまちを作っていきたいと思っています。

渡辺 ありがとうございます。私は三月まで札幌市の職員だったので、碧さんのご発言は、職員にとつて励みになります。でも、実際のところ市職員の仕事が市民に十分伝わっていない、説明不足という実態があります。このこと自体、職員は常に仕事のやり方、すすめ方を改善してかなければならないのは言うまでもありません。一方、議員の皆さんが市民に行政の動向を分かりやすく伝えていただけるのは、市民の負託を受けた議員の活動の一つといえるのではないのでしょうか。

遠藤さんは町職員と気持ちが近くなったというは、これからまちづくりを一緒にすすめていくということを感じとれました。

一方で新岡さんは、行政が身構えていると感じるのは、それだけ、議員と議会は重要な位置にあることを、改めて感じさせたのではないかと思えます。

ここで、会場の皆さんから質問、ご意見をいただければと思います。

新人議員のスキル形成での課題

質問1(大学教員) 新人議員としての技量形成、スキル形成上困っていることがあるとすれば、どんな点でしょうか。皆さんにお願いします。

渡辺 新人議員のスキルとして困っている点について、遠藤さんから順番にお願いします。

遠藤 もっと勉強したいと思っているのは、予算をはじめとする財政についてです。雄武町は札幌から遠いので、研修会や講演会にくるのも大変なので、インターネットなどでも財政を勉強できる機会があればいいのですが。

碧 会派のなかでもいろいろな勉強会がありますが、まったく政治の経験がなかったので、右往左往しながら、先輩議員を見て学び、勉強しています。

佐々木 私は先輩議員と一緒に活動し、細かいこともすぐ聞ける環境にあり助かっています。どのように質問を組み立てればいいのか、など、初めてのことにしても助言してもらい、なんとか活動しています。

いままで知らなかったことや、関心が薄かった分野の課題について学ぶことが沢山あり、時間がほしいとも思っています。

新岡 政党に所属していないので、会派をくんで用意される勉強会はあまりないので、興味をもった課題をさらに広げ深めるには、自分自身の問題意識を持続させることが大切だと感じています。

す。

沼尾 議会事務局で勉強会などを用意してくるので助かりますが、少ない事務局スタッフで全てのことを把握し整理するのは不可能です。行政は職員が多く、情報も早く入手するので、その情報が議員の手元にもあればいいのにな、と思っています。

また昨年、地方自治研究所が行った「議員をめざす人のための講座」は（企画協力・議会技術研究会）、情報を得るための貴重な場でした。

渡辺 行政側は何事も問題のない状況にしたい傾向があります。行政側が提供する情報には、決して嘘はないのですが、それらの情報が、議員が必要とする情報の全てではないといってしまうか、「行政からの情報だけで十分なのか」という、その意味では、自分たちで調べて学ぶことも必要です。

さらに、沼尾さんが指摘したように、外部の研修会やフォーラムなども役立つでしょうし、こうした場で出会った議員同士のネットワークによって情報交換し、相互に学ぶことができると思います。その外に質問のある方はいらつしやるでしょうか。

議員になったのは誰かの働きかけ それとも自身の意欲で

質問2(町議会議員) 四月の選挙で四期目に再選し、そろそろ後継者をつくりたいと考えているので、今回フォーラムに参加しました。そこで

皆さんにお聞きしたいのは、誰かの働きかけがあった議員になろうと思ったのか、それとも自身が関心をお持ちで意欲があつて議員になったのでしょうか。私の場合は、議会に対する不信任から議員になろうと思いました。

渡辺 何をきっかけに議員になったか。沼尾さんから順にお願いします。

沼尾 自分自身で議員になろうと決めました。さまざま理由はありますが、JR東日本という大きな会社に入りましたが、この会社に入りたいた人は沢山いて、自分がここにいないのもいいのかなと思つたところがあります。地元のために、と議員になって活動している若い人がいなかったため、責任感といましようか、自分がやらなければと思つたのが理由の一つです。

もう一つ挙げるとすれば、町の税金の使い方、制度、仕組みについて、自分たちはもつと声を上げていいのではないか、と思つたことが選挙に出ようと決めた理由の一つです。

新岡 先ほども触れましたが、いま同じ会派にいる先輩の議員から、一緒に議員になろう、仲間を増やしたい、という熱意に押されたのが直接的なきっかけになりました。そして一〇年前から私に関わつた住民運動で、市民の立場で行政と対峙することがあると、このままではいけない、議会のなかでできることがあるのではないかと思ひ、決意にいたりました。

あと女性の議員が少なく、とくに主婦の立場で生活に最も近いところにいる女性の声が議会に届けば、行政は変わると思つたので、選挙でも訴え

ました。家庭と議員のバランスをとりながら、活動していこうと思っています。

佐々木 当時議員だった田辺さんから「私の次は佐々木さんだと思ってる」と言われたのがきっかけです。

断れば違う人がチャレンジし、その人の活動に不満があったときには、自分で断っておきながら勝手に失恋したような気持ちになるだろうと思いました。そのことを仲間と話していたら、「結局、佐々木さんは議員をやりたいのじゃないの？」と言われて、自分の気持ちに気づくことができました。

碧 私の前任者の三宅由美さんが、四期一六年議員を務め、後継者を探しているところででした。選挙に出ようと決めたのは、三宅さんのような女性議員になりたいということと、あなたは変わらなくていいと、言われたことです。

政治に関わるきっかけになったのは、政党のポスターが雨で濡れて、人の顔がはがれているのかわいそうだなあと、思って政党に連絡したのが、政治に関わるきっかけになりました。どんなことがきっかけやチャンスになるか分かりませんので、候補者を探している方は、広い目を向けていただければと思います。

遠藤 夫が漁業をやめることにしたのが大きなきっかけです。議員にチャレンジできたのは、タイミングがちょうど一致したことがあります。議員の仕事には、以前から関心は持っていました。

学ぶ重要さ、住民・議会・事務局の連携

渡辺 デイスカッションの時間が残り少なくなりました。ここで、松山さんと橋場さんから、それぞれの報告とデイスカッションを聞いての感想と、新人議員への励ましの一言をお願いします。

松山（前登別市議会議員） 端的にお話しします。栗山町議会基本条例が制定できたのは、橋場元議長の指導力があって、中尾元議会事務局長とともに、基本条例の目的、意義など、条例の必要性を議会内で共有する環境づくりを進められ、各議員の理解が深まったことが一つ。二つめは事務局の積極的な取り組みがあり、議会事務局との連携が功をなしたと理解しています。

そこで思うことは、議会と議会事務局の連携は、条例制定のみならず、議員・議会の様々な活動においても、両者の連携システムの構築が求められていることと、議会事務局職員も、このようなフォーラムなどに参加することも必要なことですし、一緒に学ぶべきだと思います。また、二元代表制の一方を担う議会の役割と責務を果たす上で、議員・議会の活動や住民と向かい合う仕組みをはじめ、議会基本条例を遵守した取り組みのあり方など、多くの再確認の必要性を痛感させられました。

五人の新人議員からのお話からは、暮らしの中の色々な問題・課題を捉え、それらの解決への取り組みや、市民感覚を活かした議員活動、住民の声を聞き応えるべく取り組みなど、高い問題意識を持った方々が議員になつていと感じました。各々が、暮らしの中で様々な視点で問題・課題を

把握し、解決に取り組んで行くことは大切なことですが、自治体の財政状況や他の分野の政策はどのような状況にあるのかなどの行政全体の状況を把握し、行政経営の視点から、自分が取り組んでいく問題・課題の解決策と政策提言の取り組み方や、他の政策との関連性はどうかといった事にも留意することが重要かと思っています。

今日のテーマは「私はなぜ議員になったのか」ですが、私は議員を辞めたので反省を込めてお話しします。議会には、議決、監視、政策提言という三つの権能がありますが、それらを使用する上で自己の感覚・常識からの取り組みだけではなく、科学的・論理的な思考による取り組みが必要なのにも拘らず、それらの取り組みが不足だったという反省があります。三つの機能に取り組むためには、ロジカルシンキングやマーケティングなどの考えや手法を学んでいくことが必要ですし、議会の役割、責務とは何かを認識した上で取り組みをしていかなければならないと思います。

また、二元代表制での議会の取り組みは、行政側が用意した土俵上の議案や提案の論議が多く、議会側が用意した土俵での論議を多くすべきだったと思います。そして、議会が提案や対案といった政策提言していくためには、一議員の活動では限界があります。議員間をはじめ、党派、委員会でのより強固な関係や住民との連携した取り組みの中から、議会全体としての提言、問題提起していくことが必要で、その具体的な取り組みをもっと積極的にすべきだっと思います。

「枯れない好奇心を大切に」というお話があり

ましたが、全くその通りだと思います。私たちには、学ぶべき色々な分野や事柄があり、私は、それを三六〇度の円でとらえて自分は何度までのことを知り、何度に位置しているのかを考え色々取り組んでいます。例えば、一〇〇度に位置していると仮定すれば、残りの二六〇度を勉強しなければならぬ、サポートしてもらわなければならぬと捉えて議員活動をしていくと、更に学ぶことが必要となってくるでしょうし、住民をはじめ色々な方々との連携が増え、充実した議員活動になると思います。物事の本質や全体を見落とさない議会活動に向けて、ご奮闘なされることを祈念します。

住民と交流し、議会全体で課題に対応

渡辺 つづいて橋場さんお願いします。

橋場 皆さんのお話をきいて感心しています。

最初から完璧な人間などいませんから、目的をもって議員になられたのは素晴らしいと思います。市町村自治体の活動は直接住民に影響を与えますから、住民が議会に無関心では困るわけです。皆さんはいろいろな関わりや、出会いがあったでしょうが、地域の課題を解決するために、議員になりたいと思ったことは素晴らしいことです。

実は、私は議員になるのは嫌でしたが、地域から推されてようやくなく議員になったのです。議会には慣例が多くあり、なんとか慣れて、そうすると議長選挙があり、選ばれた以上断るわけにいかないの引き受けました。それまでの議長選挙

は熾烈な選挙で、私はいよいよ議長になったのだから、開き直って自分の思うことややりたいと決めました。議会事務局もいり人事ができましたし、一人で改革するのは無理なんです。

市議会は党派がありますが、町村議会にはあまり党派はありません。党派拘束がなければいいのですが、単なる勉強会というわけではないでしょうから、そういう面ではどうかと思います。議員一人で問題を解決するのは難しいと思います。議員になって課題を解決したいというお話がありましたけど、議会が一致して対応していけば、課題解決につながるでしょう。これからは、そうした議会になっていかなければなりません。

私が議長になったとき、どこの議会でも住民との対話や交流を考えていない時代でしたが、いまはそうしたことはなく、当時から変わっています。沼尾さんのように、新人議員のグループで住民の意見を聞くのは、大切なことです。

議会には慣例やいままでの流れがあり、すぐ改革するのは難しい面もありますが、皆さんは議員になったときの信念を貫いて活動されることを願っています。

渡辺 ありがとうございます。心のこもった、松山さんと橋場さんのお話でした。

私は札幌市議会事務局に一〇年在籍しましたが、委員会は全て公開していて、傍聴席に坐りきれず、廊下に椅子を並べて聞いてもらったことがあります。これはほかの議会ではないことだと思えます。このように、札幌市議会にも、評価できる点があります。すべての議会に言えることですが、

新人議員の当選により「新しい風」が吹き込むことで、議会が変わっていくきっかけになっていくものと大いに期待しています。

松山さんが議会事務局に触れ、議員の皆さんは議会事務局を頼りにしていると思いますが、時間の制約から今日は議論できませんでした。機会を改めて議論したいと思います。

議員の皆さんが日頃の活動で困っていること、悩んでいることがあると思います。こうした場での情報交換や、議会技術研究会と地方自治研究所のフォーラムなどを活用いただければと思います。今秋には、新人議員を対象にした「議員と財政」の講座を予定しています（一〇月一二日開催）。議員にとつての学びの場としてご活用いただければと思います。

以上で今日のフォーラムを終えます。新人議員の皆さん会場の皆さんありがとうございます。

本稿は、二〇一九年七月二七日に開催した議会技術研究フォーラム2019「私はなぜ議員になったのか」の報告とディスカッションをまとめたものです。

文責・編集部